

坂の上の暮らし

(2022年度県民ボランティア振興基金事業)

2022年10月5日
 させぼ山手研究会(Sasebo Yamanote Workshop)
 Email:mitsuguhimaki72@gmail.com
 電090(4205)7471
 (編集・責任 檜楨 貢 理事長)

市民防災と斜面居住

●共通する2つの視点

市民防災活動を推進されているさせぼ山手研究会のメンバーから、「市民防災」のあり方を聞いた。

「ハザードマップは住民に見えず、住民の防災マップは行政には見えないものだ」と言われました。たしかに、ハザードマップは俯瞰的で専門性が高いために、住民にはわかりにくい。だからもう1つのマップがいるのだという。それは日常生活に裏付けられた「自主防災マップ」である。だから、ハザードマップだけでは人の命は救えない。住民主体の自主防災があり、ハザードマップと共に鳴・共振させることが大事です。ここでの「自主防災マップ」は高齢者、障がい者等の実態を踏まえた、「近助」のしくみだと説明された。近所ではありません。近くの人が助ける「近助」なのです。

私たちの坂の上の暮らしのこと。ハザードマップのような土地利用のあり方（計画）で満足していませんか。もう1つの「自主防災マップ」のようなコミュニティに裏付けられた斜面地での居住マップがいるのではありませんか。近所ではなく、「近助」のコミュニティをもつことが必要なのではありませんか。

斜面地で生活する私たちは地形、地質、道路、公園、土地の値段という上からの計画だけで生きて行こうとしているのでしょうか。便利か不便か、楽しい暮らしか、つまらない暮らしなのかは、その場所に住む人たちが独自につくり上げていくものではないでしょうか。

●「普通の暮らし」の大切さ

市民防災の講師は私たちに言わされた。まちの現場を歩くことです。そこには「普通の暮らし」があって、本当の課題はそこにあるはずです。行政や専門家は一般的な課題をわかってはいるが、「普通の暮らし」のことには素人なのです。

斜面地での雨の時の水の流れ、空き地に捨てられたごみや雑草、放置された空き家等を「普通の暮らし」から見詰め直していくことが大切なことです。

出典：自主防災というキーワード（まちづくりの将来）<https://ameblo.jp/nihimaki227/entry-12766063341.html>

「第2回ワークショップを9月20日実施」

白南風町における坂の上の暮らし探しのためのワークショップを9月20日14時から16時まで白南風町36番10号の旧山博義邸（2階旧ダンスホール）で開催。2回目とあって、周辺住民や包括支援センターの関係者等17名が参加。わきあい合いの雰囲気で進んだ。今後は北九州市や長崎市での先行事例を学び、佐世保市政策とも連携しながら、進めていくことになる。

「理事会報告」

同じ会場において9月20日10時から12時まで9月理事会を開催。出席者は宮城監事、檜楨理事長、田中副理事長松尾涉外担当理事、瀬尾会計担当理事、柄澤会員の6名。させぼ山手研究会発足以降の収入支出状況、今後の事業、市民組織としての運営課題等が審議された。長崎県からの助成もあって、組織運営は着実に進んでいる。次年度以降の事業計画を進めることが必要だと認識されている。

斜面地低未利用地再生事業
 佐世保市との連携や県外調査を企画中。
 10月中旬には、九州大学や有明高専の先生と会員メンバーが博多駅周辺のワークスベースで意見交換を開催する。

防災シビックプライド育成事業

斜面モビリティ事業
 「ノボロ」の市内斜面昇降する実験を行っている。